

＜第7分科会＞

「学校給食における栄養管理の在り方～児童生徒の体格に合った給食提供と指導への活用～」

指導助言者 岸和田市立山滝小学校
校長 根川 和美

《はじめに》

学校給食は、児童生徒の心身の健康を支えている重要な教育活動である。そして、食育の推進において、学校給食に直接携わる栄養教諭等への期待は大変大きなものである。

栄養教諭の職務内容は大きく分けると、「主として食育に関すること」と「主として学校給食の管理に関すること」の二つである。一つめは、「各教科等における指導に関すること」（食に関する指導の全体計画の作成・給食の時間における児童生徒への給食指導及び食に関する指導・各教科等における食に関する指導への参画）と「食に関する健康課題の相談指導に関すること」が挙げられる。二つめは、「栄養管理に関すること（学校給食実施基準に基づく栄養管理）」と「衛生管理に関すること（学校給食衛生管理基準に基づく衛生管理）」である。

これら職務は切り離すことなく常に連動して行われるものであり、今回の研究発表もまさに「栄養管理」と「食に関する指導」が一体となって進められた取組みである。

《取組みについて》

児童生徒が体格に見合った給食を食べるためには、まず実態把握が必要である。それに基づいて、推定エネルギー必要量を算出し、自分の食べる量を理解することから始まる。推定エネルギー必要量の算出には大変労力を費やしたと察する。また、個々の児童生徒へエネルギー必要量を提示する際、ごはんの量に注目できるように写真で視覚的に示していることは効果的な方法である。さらに小学校では、実際の給食のごはん椀にカードと同じ量のごはんをよそう体験をさせている。その結果、給食の配膳時にはご飯の量を調整する姿が見られ、児童の意識や態度の変容がうかがえる。また中学校では、給食時間の教室巡回指導により、学校全体の残菜量は少ないが、個々の喫食量にばらつきがあることをとらえている。一人ひとりが必要な食事量を喫食することができるようになるため、具体的な数値や配膳方法を紹介し、食育教材を活用して食に関する指導を行っている。そうすることで必要量を食することの大切さの理解はもとより、食生活の重要性を理解し、学級全体で食への関心が高まった。全体の残菜量で判断せず、踏み込んで一人ひとりに焦点を当てて指導した結果である。栄養管理が万全な学校給食を提供できたとしても、児童生徒が一人ひとりに見合った必要量の給食を食べていなければ、必要な栄養素を摂取したとは言えない。またそれ以前に、各自の必要量があることを児童生徒が知る必要がある。このようなことを考慮し、「食に関する指導」と「栄養管理」を連動させたことで、児童生徒が興味・関心・意欲をもち、行動変容する取組みになったと考える。

《成果と課題について》

小学校、中学校と目的は同じであるが、校種に応じた方法で取組みを行ったことが成果をもたらした要因の一つである。食に関する指導は、「実物を提示する」「視覚に訴える」「体験する」「身近なことに照らし合わせる」などが重要である。これらを取り入れることで理解が深まり行動につながる。今後も指導に活かしていただきたい。また、小学校から中学校の9年間を見据えた、系統立てた食育の実践を期待する。そのためには小中学校の教職員との連携を深め、全市的な取組みに広がることを願う。

《おわりに》

今回の研究報告では、学校給食の基盤となる栄養管理の在り方に着目し、見直しを行ったことにまず敬意を表したい。日頃から栄養教諭等が巡回指導をし、給食センターと学校が連携して食育に取り組んできたことがうかがえる。子どもたちの健やかな成長のためにこれからの食育の推進に大いに期待したい。